

松 山 大 学 論 集
第 23 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 1 年 4 月 発 行

伝統的消費都市の政治
—— 愛媛県宇和島市の戦後政治 ——

市 川 虎 彦

伝統的消費都市の政治

—— 愛媛県宇和島市の戦後政治 ——

市 川 虎 彦

1 宇和島市～南予地方の中心都市

愛媛県宇和島市は、江戸時代の城下町を基盤に発展した都市であり、愛媛県西南部（通称：南予）の中心都市である。市域の大部分は山地によって占められている。宇和海に面した平地部は、干拓や埋め立てによって造成されてきた。そこに宇和島の市街地が形成されている。

城下町としての宇和島の原型を形づくったのは、藤堂高虎だとされている。藤堂高虎は、豊臣秀吉の四国平定後、1595（文禄4）年に宇和郡7万石に入封した。板島丸串城を本城と定め、6年かけて大改築した。また、新しい城下町も建設された。1607（慶長12）年、藤堂は同じ伊予の今治に移り、さらに翌年、伊勢の津に転封される。かわって富田信高が10万石で丸串城に入るも、5年で改易されてしまう。幕府直轄領を経て、1614（慶長19）年、大阪冬の陣の後、伊達政宗の長子・秀宗が、宇和郡10万石に封ぜられることになる。初代藩主伊達秀宗の治世時に、「板島」は「宇和島」に改称され、現在に至っている。1657（明暦3）年、五男の伊達宗純の分知願いが許され、吉田藩3万石がたてられる。以後、宇和島藩は7万石となる。伊達家は、明治維新まで宇和島の地を統治した。8代宗城は、「幕末の4賢侯」の1人に数えられる。宇和島城は、現在も市内中央の丘陵の上であり、全国に現存する12の江戸時代以来の天守閣の1つとなっている。

1871（明治4）年の廃藩置県で、宇和島藩は宇和島県となる。1873（明治6）

表1 市域の変遷

年月日	事項	人口(人)	面積(km ²)
1889年12月15日	町制施行	—	—
1917年5月1日	丸穂村を編入	18,013	—
1921年8月1日	八幡村と合併 市制施行	32,295	32.57
1934年9月1日	九島村を編入	51,280	54.17
1955年3月31日	三浦村・高光村を編入	66,154	82.65
1957年1月1日	来村を編入	68,160	118.26
1974年4月1日	宇和海村を編入	70,992	142.91
2005年8月1日	宇和島市・吉田町・津島町・三間町が新設合併	92,672	469.47

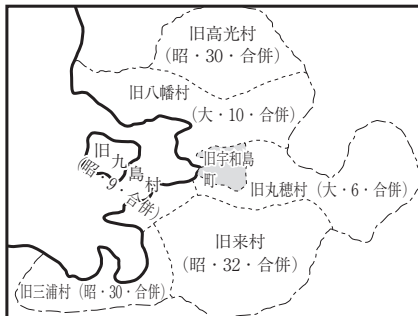
出所)『宇和島市誌』下巻の記述より作成

注) 2005年8月1日の欄の人口は、2005年6月末の数値。

年に愛媛県が成立し、これに宇和島県も統合される。1889(明治22)年、町制が施行され宇和島町が成立する。さらに1921(大正10)年には、八幡村との合併を実現し、市制が施行された。これは中予(愛媛県中部)の城下町・松山、東予(愛媛県東部)の城下町・今治につづいて、愛媛県下に成立した3番目の市であった。これで、東、中、南予の代表的な城下町が、それぞれ近代都市をめざして再出発することになったのである。

戦前の宇和島市の産業の中心は、製糸業であった。北宇和郡自体が、愛媛県

図1 宇和島市域の変遷



出所)『宇和島市誌・上巻』P.413
(1957年までの変遷)



出所)『愛媛県市町村合併ホームページ』より
(2005年8月の合併)

内屈指の養蚕地帯であり、それを背景に宇和島市内に製糸業が立地し、活況を呈していた。しかし、1930年代に入ると、次第に製糸業は衰えていくようになる。大恐慌の影響と化学繊維の普及に生糸が押されるようになったためである。そのような中、宇和島市は工場誘致に成功し、1936年から近江帆布工場が操業を開始した。宇和島市にとって待望久しかった大規模工場であり、従業員千人近くを雇用したのであった。しかし、戦火の拡大によって、原料となる綿花の輸入が絶え、1941年8月に、操業停止に陥ってしまったのである。

第2次世界大戦末期の1945年5月から、宇和島市は合計9回の空襲を受ける。戦災による宇和島市の消失面積は1,312haに達し、それは市街地の約7割にあたった³⁾。戦後は、まさに焦土の中からの復興となった。

戦後の宇和島市の人口の推移を見ると、高度経済成長期を通じて人口が減少しつづけた。こうした人口減は、八幡浜市・大洲市といった他の南予の都市と

表2 宇和島市・大洲市・八幡浜市の人口の推移 (人)

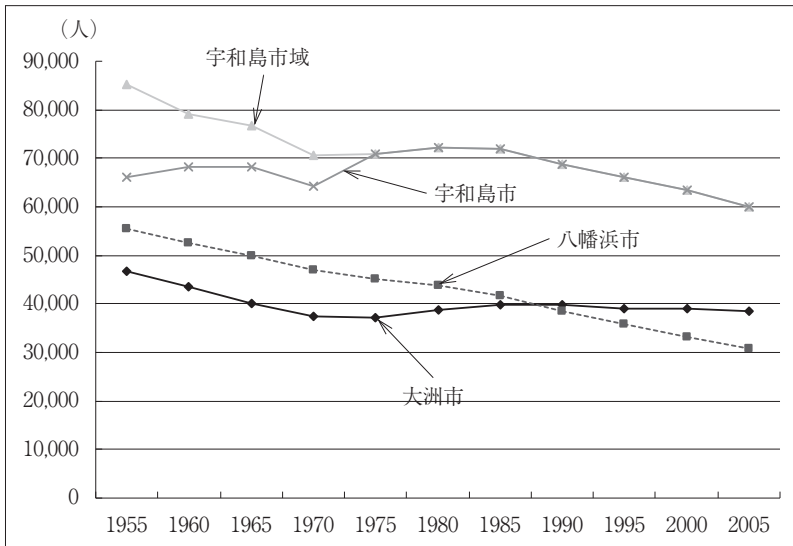
年	宇和島市域	宇和島市	大洲市	八幡浜市
1955	85,146	66,154	46,813	55,471
1960	79,131	68,160	43,583	52,527
1965	76,749	68,106	40,165	50,005
1970	70,730	64,262	37,324	46,903
1975	70,969	70,969	37,294	45,259
1980	72,260	72,260	38,719	43,823
1985	71,949	71,949	39,915	41,600
1990	68,888	68,888	39,850	38,550
1995	66,169	66,169	38,937	35,891
2000	63,495	63,495	39,011	33,285
2005	59,928	59,928	38,458	30,857

出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

注1) 「宇和島市域」は、2005年7月末までの旧宇和島市の領域の人口を示す。「宇和島市」は、その時点での行政上の区域として宇和島市の人口を示す。

注2) 2005年の数値は、宇和島市・八幡浜市・大洲市とも合併前の旧市域の値。

図2 宇和島市・大洲市・八幡浜市の人口の推移



出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

同様であった。しかし、石油危機による高度経済成長の終焉とともに、1970年代後半から人口減少に歯止めがかかった。全国的に見ても、石油危機からバブル景気が始まる前までの間は、3大都市圏への人口流入が停滞した時期にあたっている。しかし、宇和島市は1980年代後半以降、再び人口減少に見舞われるようになった。

戦後の宇和島市において、繊維産業が復興することはなく、また大規模な雇用をとまなうような工場誘致も行われなかった。食品加工などの小規模な工場がわずかに立地するのみで、自ら「煙突のない町」と呼ぶような都市となった²⁾

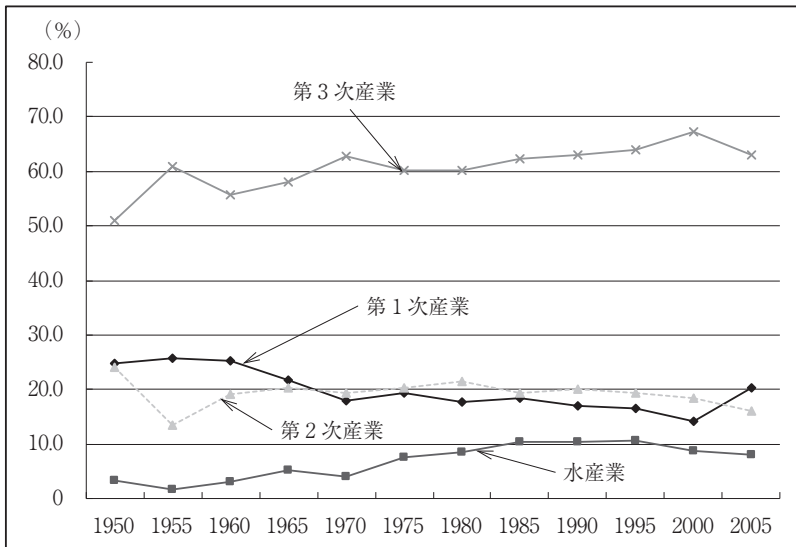
こうした中で、70年代から80年代前半の人口維持を支えたものの1つに、水産業の隆盛がある。宇和島の水産業の中心は、リアス式海岸を生かした養殖水産業である。とりわけ真珠やハマチの養殖が主力となってきた。真珠養殖は、

表3 宇和島市の産業別就業者比率の推移 (%)

年度	第1次産業	(水産業)	第2次産業	第3次産業	就業者総数
1950	24.7	3.4	24.1	51.0	19,782
1955	25.7	1.7	13.5	60.8	25,008
1960	25.2	3.0	19.0	55.8	27,184
1965	21.6	5.3	20.3	58.1	29,732
1970	17.9	4.0	19.3	62.7	30,719
1975	19.3	7.6	20.3	60.2	32,762
1980	17.8	8.6	21.4	60.1	34,312
1985	18.3	10.3	19.3	62.4	33,429
1990	16.9	10.3	20.1	62.9	32,331
1995	16.6	10.7	19.3	64.0	32,132
2000	14.1	8.8	18.4	67.3	29,265
2005	20.2	8.0	16.1	63.0	42,216

出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

図3 宇和島市の産業別就業者比率の推移



出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

三重県伊勢湾の業者が、養殖適地を求めて宇和海に進出してきたところから始まり、1958年頃から地元業者の養殖事業も軌道にのり始めた。一方、ハマチ養殖は、津島町の山本彰がその嚆矢とされ、1959年に開始された。1967年の過剰生産による真珠不況の際に、ハマチ養殖に転換する業者が出て急増する。

宇和島市も他の都市と同様に、戦後一貫して農業就業者比率は低下していった。しかし、水産業就業者比率は1970年代から1990年代初めにかけて増加していったのであった。こうして、宇和島を中心とした宇和海域は、日本有数の養殖生産地となるのであった。養殖水産業の拡大は、稚魚・餌料供給、資材供給、水産医薬品、水産物運搬などの関連産業の発達も促した。しかし、過剰生産による魚価の低迷や、1994年頃から始まったアコヤ貝の大量斃死などにより、水産生産額および業者数ともに急減しており、かつての繁栄に翳りがさしている。

宇和島市の産業のもう1つの特徴は、南予の中心都市として、第3次産業が早くから発達していたということである。宇和島市の第3次産業の就業者人口

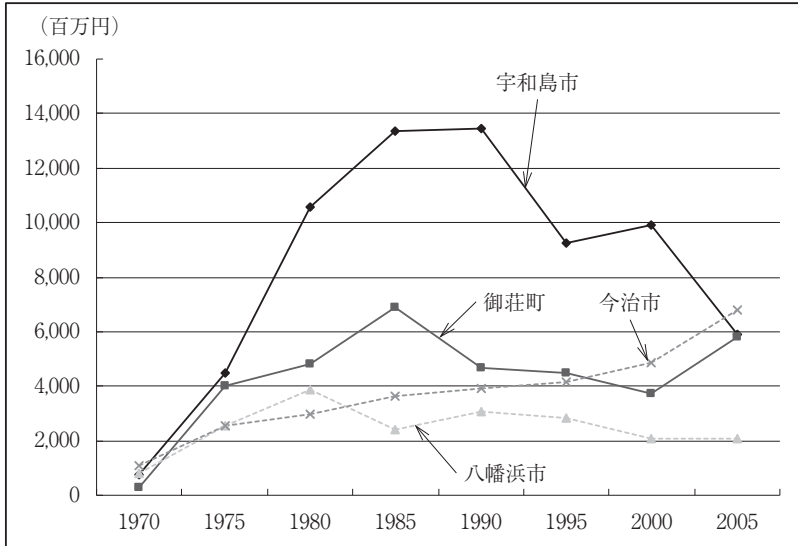
表4 宇和島市・御荘町・八幡浜市・今治市の水産業生産額
(百万円)

年	宇和島市	御荘町	八幡浜市	今治市
1970	732	282	793	1,102
1975	4,475	4,008	2,540	2,529
1980	10,563	4,818	3,863	2,953
1985	13,357	6,887	2,410	3,652
1990	13,451	4,653	3,065	3,938
1995	9,241	4,504	2,852	4,173
2000	9,930	3,742	2,063	4,878
2005	5,889	5,808	2,100	6,819

出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

注) 2005年の数値はすべて合併後の自治体の数値。御荘町は、他の南宇和郡の町村と合併して「愛南町」となった。御荘町の2005年の欄の数値は、愛南町の値。

図4 宇和島市・御荘町・八幡浜市・今治市の水産業生産額



出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

比率をみると、明治時代は「伊予の大阪」といわれるくらい商業で栄え、伝統的に商業集積が存在していた八幡浜市を凌駕していた。1970年までは、愛媛県の中心都市・松山市と同程度の第3次産業就業者比率をもっていた。宇和島市内だけに限らず、北宇和郡・南宇和郡などの周辺町村の人々の購買力も宇和島に引き寄せていた様子が見えてくる³⁾。城下町の伝統の上に、商業・サービス業の中心が築かれていたのである。

小売業販売額で見ると、宇和島市は1990年代まで順調に、その額を伸ばしてきた。しかし、2000年代に入ると、小売業販売額は減少に転じる。これは経済停滞の影響と宇和島市の小売業が商圏とする南予地域全体の経済的な疲弊や人口減少が原因だと思われる。それとともに、同じ南予の大洲市に新たな商業集積が生まれたことや2004年に松山自動車道が西予宇和インターチェンジまで開通したことなどがあり、宇和島圏から購買力の流出が起きていること

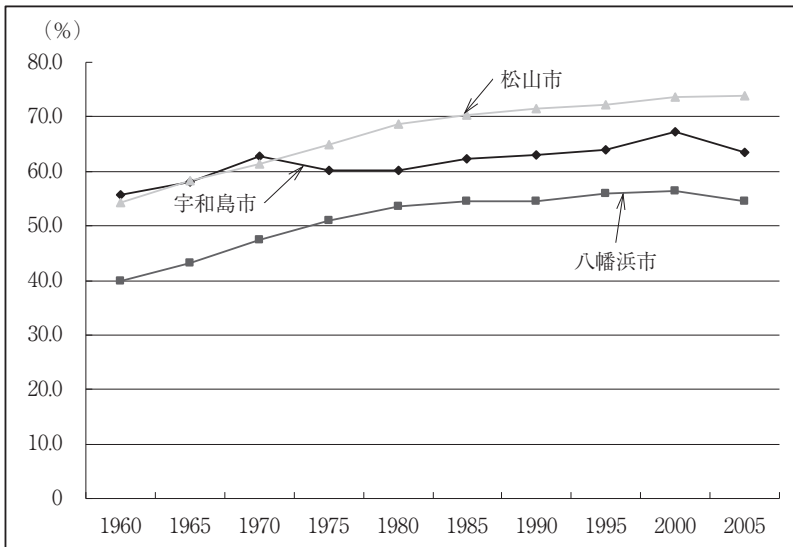
表5 宇和島市・八幡浜市・松山市の第3次産業就業者比率の推移 (%)

年度	宇和島市	八幡浜市	松山市
1960	55.8	40.0	54.2
1965	58.1	43.3	58.3
1970	62.7	47.5	61.3
1975	60.2	51.0	64.9
1980	60.1	53.6	68.6
1985	62.4	54.5	70.4
1990	62.9	54.4	71.4
1995	64.0	56.0	72.2
2000	67.3	56.5	73.7
2005	63.5	54.6	73.8

出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

注) 2005年の数値はすべて合併後の自治体の数値。

図5 宇和島市・八幡浜市・松山市の第3次産業就業者比率の推移



出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

も考えられる。南予で絶対的な地位を保ってきた宇和島市の第3次産業も揺らぎ始めているといえる。

このように宇和島市はもとより、南予全体が閉塞感を色濃くする中で、「平成の大合併」が模索された。2001年2月に愛媛県から発表された市町村合併推進要綱では、合併の基本パターンとして、宇和島市・吉田町・津島町・三間町・広見町・松野町・日吉村の1市5町1村の合併が提示された。この基本パターンよりも統合度の低い参考パターンでは、宇和島市・吉田町・津島町の1市2町による合併と、鬼北地域3町1村⁴⁾の合併に分けるものであった。鬼北4町村のうち、三間町は宇和島市との合併を選択したため、宇和島市・吉田

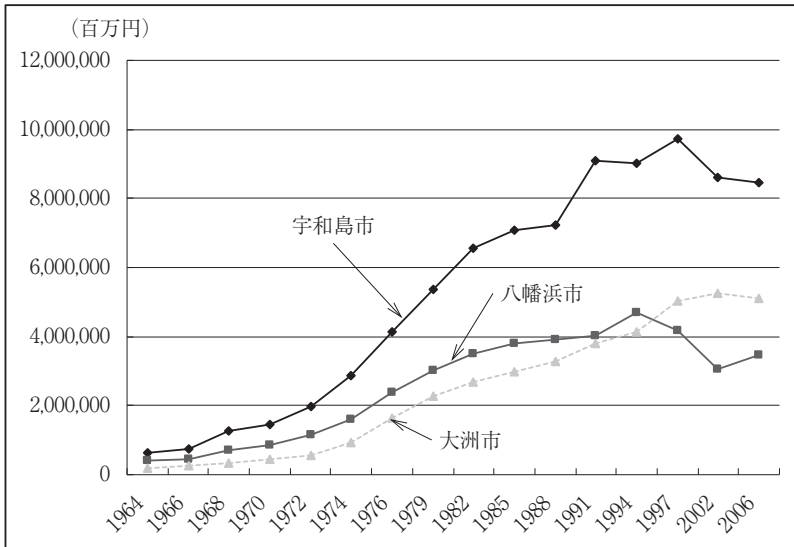
表6 宇和島市・大洲市・八幡浜市の小売業販売額の推移
(百万円)

年	宇和島市	八幡浜市	大洲市
1964	633,014	396,152	191,621
1966	741,563	449,773	246,690
1968	1,251,725	709,354	346,627
1970	1,439,693	861,953	443,228
1972	1,964,914	1,151,913	564,772
1974	2,886,220	1,602,844	940,125
1976	4,141,364	2,397,249	1,623,063
1979	5,363,446	3,010,366	2,257,310
1982	6,577,389	3,485,459	2,693,787
1985	7,082,156	3,807,397	2,983,510
1988	7,235,656	3,923,049	3,287,866
1991	9,080,774	4,020,451	3,799,850
1994	9,017,347	4,689,612	4,128,995
1997	9,734,124	4,177,471	5,016,260
2002	8,615,986	3,054,435	5,272,385
2006	8,469,825	3,452,057	5,110,780

出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

注) 2005年の数値はすべて合併後の自治体の数値。

図6 宇和島市・大洲市・八幡浜市の小売販売額の推移



出所) 愛媛県統計協会『統計からみた市町村のすがた』各年度版より作成

町・津島町・三間町の枠組みで合併を目指すこととなった。2002年5月に任意の合併協議会が、9月には法定の合併協議会が設置された。しかし、2004年4月に、宇和島市が合併協議会からの離脱を表明した。これは、津島町が02年度以降、建設事業を増大させた点などを理由としていた。合併の核となる宇和島市の協議会離脱表明により、合併協議会は一時的に休止とならざるをえなかった。その後、協議会は9月に再開され、合併の目標期日は2004年10月1日から05年8月1日へ繰り延べされた。こうして難産の末、2005年8月に新「宇和島市」が発足したのであった。

2 宇和島市政の推移

2-1 戦後復興期～国松市政・中平市政・中村市政

第2次世界大戦下の1942年7月に宇和島市長に就任した上田宗一は、敗戦

後、公職追放を受け、1946年3月に市長職を辞した。宇和島市会は、後任の市長に国松福禄を選出した。国松は、北宇和郡岩松町（現：宇和島市津島町）出身で、旧制宇和島中学を卒業後、三高などを経て東京帝国大学法科学部（現在の東大法学部）へ進んだ。卒業後は弁護士として活躍し、1926年10月の宇和島市会議員選挙で初当選を果たしていた。1931年9月には北宇和郡選挙区から立候補し愛媛県会議員に当選、1940年5月に再び宇和島市議員となっていた。

1947年4月に、公選による初の宇和島市長選挙が行われることとなった。現職市長の国松福禄は自由党公認で立候補した。同じ自由党から、さらに2人の立候補者があった。井上源一と中川千代治である。井上は、北宇和郡蔭瀨村（宇和海村→宇和島市）の出身で、明治法律学校（現明治大学）を卒業後、国松と同じく弁護士をしていた。1914年に初めて宇和島町会議員に当選して以来、北宇和郡会議員、宇和島市議員を連続して務め、1933年5月には、57歳で第5代宇和島市長に選出されている⁵⁾。しかし、1935年の県会議員選挙に絡む選挙違反で逮捕され、同年12月に市長を辞任していた。今回は70歳を超えて、再度市長の座を目指しての立候補であった。

もう1人の自由党候補者・中川千代治は、八幡浜市向灘の出身で、宇和島政界の大物の一人である中川鹿太郎⁶⁾の養子に入った。八幡浜商業から早稲田大学政経学部に進み、早大卒業後、1934年に20代で予州銀行吉田支店長に就任していた。今回は41歳という若さでの市長選立候補であった。他に、社会党公認で清家栄が立候補した。

選挙は、国松と中川が競った。開票の結果、当初、国松の当選かと思われた。しかし、第2開票所で300票の誤算が判明し、さらに301票の疑問票が指摘されたため、国松の得票数が6,857票から6,256票に修正された。その結果、首位の国松の得票数は、当選に必要な有効投票数の8分の3（6,537票）を下回ってしまった。そこで10日後に決選投票を行う運びとなった。

決選投票は激烈な接戦となり、結果はわずか5票の差をもって国松の当選と

なった。翌日、これに承服できない中川派の運動員たちは、選管に対し票の再審査を要求した。後日、正式に異議申し立てがなされ、進駐軍立会いの下で再審査がなされた。その結果、5票差はくつがえらず、国松の当選が正式に決定した。

国松市長は、戦災にあった宇和島市内の復興に取り組んだ。そのなか、伊達家所有の宇和島城天守閣他の物件と城郭建築物が残る城山の土地について、伊達家から宇和島市へ寄付の申し入れがあった。これによって宇和島城と城山は市に移管され、今日に至るまで宇和島の象徴としての役割を果たしてきている。

国松は戦後の復興事業を継続して担うとして、1951年の市長選に再選を目指して、自由党公認で立候補した。これに対して、同じ自由党から佐々木饒も立候補を表明した。佐々木は、製氷会社を経営に携わったかわら、戦前に4期、宇和島市議員を務めていた。さらに1935年の県議員選挙宇和島市選挙区に、民政党公認で立候補し当選を果たしていた。しかし、戦後第1回の県議選に出馬するも、270票の僅差で落選を経験する。この統一地方選では、市長の座に狙いを定めて立候補してきた。

宇和島市長選と同時期に行われた1951年の愛媛県知事選は、保守政党の自由党が分裂する激しい選挙戦となった。現職知事の青木重臣に対して反青木派が担いだのが、西宇和郡伊方村（現伊方町）出身の佐々木長治であった。佐々木は、戦前に23歳で西南銀行頭取の地位に就き、予州銀行頭取などを歴任した。さらに政界にも進んで、衆議院議員、貴族院議員を歴任していた人物で、愛媛県政界の重鎮であった（今井、1966：P.24）。この時の宇和島市長選は、「県知事選の縮図」と呼ばれ、佐々木饒は南予出身の佐々木長治支持を掲げて市長選を戦った。佐々木陣営には、反青木派の県議・向井三治がついた。一方の国松は、自由党の公認決定にしたがい、青木支持で動いた。

さらにもう1名、社会党から中平常太郎が立候補し、三つ巴の選挙戦になった。中平は、西宇和郡伊方村（現：伊方町）の出身で、宇和島高等小学校を卒

業した。20代でキリスト教に入信している。1911年に北宇和郡議員に当選、1913年から醤油醸造業を営み、社会事業にもりだしている。1915年には宇和島町会議員、1925年から宇和島市会議員に2回連続当選している。戦後、1946年に愛媛県労働委員会会長に就任し、1947年の参議院議員選挙では社会党公認で立候補し、久松定武（愛媛民主党・後の愛媛県知事）に次いで2位となった。そのため、3年任期の参院議員となった。今回は、国労やバス会社の労組などの支援を受けて市長選に挑むこととなった。

選挙戦は3候補の大接戦となり、下馬評では現職の強みを生かした国松を佐々木が追う展開だとみられた。ところがふたを開けてみると、1位中平・2位国松・3位佐々木の順であった。中平は、保守分裂の間隙を突いて首位にたった。しかし前回同様、1位の中平の得票が法定得票数に達せず、上位2名による決選投票が行われることとなった。

中平－国松で行われた決選投票は、中平が票差を約3千票に広げ、当選を果たした。愛媛県内における初の社会党公認市長の誕生であった。県知事選も保守分裂選挙の中、社会党・民主党共同推薦の久松定武が当選を果たした⁸⁾。「県知事選の縮図」と呼ばれた宇和島市長選は、奇しくも県知事選と同様の結果となったのであった。宇和島市長選と同時に行われた宇和島市議選では、社会党・共産党両党の候補者が全員落選するという状況の中で、極めて異例な社会党市政の成立であった。

中平市長は、社会福祉行政の推進機関である福祉事務所を、条例を制定して設置したり、市立宇和島病院内に産院を建設するなど、社会党市長らしい政策を展開した。しかし、この時期の他の自治体と同様に、戦後復興や学校の整備などに多額の経費がかかるのにもかかわらず、国の財政的な措置がなかったため、財政赤字に苦しむことになった。そのような中で、「昭和の大合併」として、1955年3月に高光村・三浦村の編入合併を実現し、中平市長は勇退した。

1955年の市長選に、早くから意欲を示していたのが、宇和島市選出の県会議員・向井三治であった。向井は、戦前に1936年から3期連続で宇和島市会

議員を務めていた。戦後第1回の県議選で当選を果たし、2回連続当選していた。反向井派は、対立候補として戦前に宇和島市長、愛媛県議、衆院議員などを歴任した高島亀太郎を引っ張り出そうとした⁹⁾。高島は、1942年の衆院選において翼賛政治体制協議会推薦で当選していたため、戦後、公職追放となった。この時点では追放は解除されていた。高島はこの申し出を固辞し、代わりに甥にあたる中村純一の擁立にもっていった。中村純一は、宇和島中学から一高、東京帝国大学へと進み、卒業後は通信省に入省した。1945年の敗戦直前に、貯金保険局長で通信省を退官した。この時、43歳であった。戦後になって、1947年の衆院選に愛媛3区から立候補するも落選。1947年の総選挙で初当選を飾る。しかし、1952年の総選挙では再び落選の憂き目をみていた¹⁰⁾。ここで、市長選に鞍替えしての出馬となった。

逆に向井三治は、持病の脊椎カリエスが悪化し、市長選立候補を断念する。かわって市長選への立候補を表明したのが、1947年の市長選においてわずか5票の差で落選した中川千代治であった。中川は市長選落選後、1951年の県議選に立候補し、ここでも次点で敗れていた。衆院選2回落選の中村と、市長選、県議選連続落選の中川との選挙戦は、ともに後がない者同士の戦いと評された。

中村は、向井三治の県議選におけるライバルだった山本友一（この時点では代議士）の支援を受け、宇和島市議の大半を占める山本派市議が応援に回った。これにより、中村優勢とされた。しかし、出馬を断念した向井三治が中川支持に回り、中川陣営は追い上げをはかる体制になった。中川は周辺部で強みを見せた。しかし、結局は市中心部を制した中村の当選であった。票差は約1,600票で、中村としては思わぬ接戦となった。

赤字財政を前市長から受け継いだ中村市政の最大の懸案は財政再建だった。結局、1956年に国の財政再建特別措置法による赤字再建団体の適用を申請し、財政再建を進めることになった。市職員に退職者を募って財政健全化を進めようとしたため、市職組との間に激しい争いも生じた。合併に関しては、中

断していた来村との合併を実現にこぎつけることができた。

宇和島市では、戦後、3代にわたって1期限りの市長が続いた。そうした不安定な市政の中で、戦後復興と財政再建という両立しがたい目標の実現に向けて努力がなされた。

2-2 政争と汚職の時代～中川市政・山本市政

1959年の市長選は、現職の中村純一市長の再選が濃厚だと見られていた。4月18日の公示日に立候補を届け出たのは中村市長のみであった。ところが立候補届出締め切り直前の22日になって中川千代治の推薦届けが提出された。中川は、これを断るために、急遽東京から帰郷した。しかし、支持者の出馬要請を断りきれず、24日になって選挙戦に突入した。中村市長側は、無投票再選の動向だった中で、選挙戦の準備がまったく整っていなかった。逆に、遅れをとってしまうという皮肉な選挙戦開始となった。中川陣営には、市民からのカンパや、手弁当の運動員の参加などがあり、選挙戦を押し気味に進めた。結果は、番狂わせで、中川の当選であった。しかも9千票を超える大差を現職市長につけての勝利であった。そして、推薦選挙、カンパ、手弁当の運動員など、「理想選挙」が実現したとの評価も得たのであった。

前述のように、中川は1947年の市長選に敗れて以降、衆院選、県議選、そして再び市長選と、落選続きであった。そうした中川に対する同情票が集まったことが、勝因の1つとされる。また、不明朗な印象を与える市の土木事業をめぐって、中村市長に対する一般市民の批判もあったことが、中川当選の要因にあげられた。

中川市長は、積極的な市政を展開し、矢継ぎ早に事業を推進していった。主なものは、上水道事業拡張、城東中学校新設、消防本部庁舎新築、宇和島城天守閣修理工事、ごみ焼却施設建設、市立宇和島病院本館新築などであった。さらに、職業訓練所の誘致にも成功した。一方で、議案の撤回、修正が相次いだり、前市政の残した繰越金や国有林払い下げにともなう木材売却で得た利益な

どを使い果たしており、将来の財政を危惧する声も上がっていた。また、過大な交際費の費消や外遊（国連大会出席）にも批判の声がもれていた。

こうした中、中川市長は1963年に予定されていた次期市長選に立候補することを早々に表明した。その1963年1月には、まず愛媛県知事選が行われた。この県知事選挙は、保守分裂の激しい選挙戦となった。自民党では、久松知事に反対する勢力が自民党同志会という会派を立ち上げており、宇和島市選出の3県議のうち、藤田定吉・中畑義秋の両名が同志会に加わっていた。自民党同志会は、久松知事に対する対抗馬として、社会党・民社党とともに愛媛新聞社長・平田陽一郎を擁立した。一方、中川市長は久松支持で動いた。結果は、4千票あまりの僅差で久松4選であった。

知事選で平田支持だった藤田定吉県議は、知事選後、宇和島市長選をめざして準備を始めた。藤田は九島出身で、宇和島中学を卒業した。1940年に宇和島市会議員選挙において31歳で初当選を果たす。戦後になると、1947年・1951年の宇和島市議選に2回連続当選、1955年・59年の愛媛県議選では宇和島市選挙区において2回連続当選を果たしていた。この間、九島農協組合長などを務めている。

知事選では、自らが推す久松知事が当選した中川陣営であった。しかし、市長選の前哨戦の意味合いをもった県議選では、中川市長に近い佐古田光義がよもやの落選を喫してしまう。逆に、平田支持で藤田と連携した中畑義秋と国村三郎（社会党）が、県議に当選を果たしたのであった。当初、現職の中川有利とみられていた市長選であった。だが、この県議選の結果によって、俄然、藤田優勢の声が強くなった。藤田は、市財政の巨額な赤字を批判し、出身の九島を中心に市周辺部で優位に立った。また、革新票も藤田寄りであった。

結果は、大票田の市内中心部を制した中川が、周辺部での劣勢をはね返して、僅差の勝利をおさめた。藤田優勢の観測に組織が引き締まったことと、商店街のアーケード設置や中心部の道路舗装など、中心部住民の支持を調達しやすい実績を、任期中にあげていたことが勝因にあげられた。宇和島市では、公

選となつてから3代続けて、1期かぎりの市長が続いていた。しかも、国松、中村の両市長は、現職市長として出馬した市長選で落選の憂き目を見ていた。そのため、宇和島では「市長は再選できない」というジンクスもできつつあった。中川は、このジンクスを破り、初めて再選された市長となった。

中川市長は、2期目においても、和霊公園、屎尿処理施設、学校給食センターなどを整備していった。一方で、工場誘致もはかり、ブドウ糖工場の誘致に成功した。1964年には、宇和島市工場誘致奨励条例を制定し、さらなる工場誘致をめざした。また、赤字再建団体からも脱していた。

こうした実績をひっさげて、中川市長は3選を目指した。この中川の前に立ちふさがったのが、宇和島政界の長老である山本友一であった。山本は、北宇和郡下灘村（現：宇和島市津島町）の出身で、下灘高等小学校卒業後、宇和島の回漕会社に丁稚奉公にだされた。21歳の時に独立して、自ら回漕会社を営むようになる。1936年、31歳で宇和島市議員選挙に立候補し初当選を飾る。以後、3回連続当選を果たす。戦後は宇和島市選挙区から県議選に立候補し、2回連続トップ当選をし、県議会議長も務めた。さらに1953年4月の総選挙に、自由党公認で愛媛3区に立候補し初当選する。1955年の総選挙で連続当選する。次の58年の総選挙では、当確の報を受けて万歳三唱をした後に落選とわかる、いわゆる「バンザイ落選」の主演となってしまった。すべての票が開いてみると、わずか304票差の次点であった¹¹⁾。山本は捲土重来を期するも、58年総選挙時の愛媛3区は、定数3に対して、自民党公認の有力候補が4名立候補して鎬を削る状態であった。落選中の山本には、自民党幹部から説得がなされ、次の総選挙への不出馬をのまされた¹²⁾。こうして山本は、政治経歴に空白期間をつくることになる。しかし山本は、1967年の宇和島市長選に立候補してきた。山本にとって9年ぶりの選挙となったのである。

この山本陣営には、前回市長選で落選した元県議の藤田定吉がついた。そして山本は、元代議士ゆえの「中央直結」の利点を説くと同時に、中川市政を不明朗市政と呼び、現職批判を繰り返した。自民党公認を得た山本は周辺部に強

く、さらに自らの生地である津島町出身の宇和島在住者に浸透するなどした。その結果、現職の壁を破り、3千票あまりの差をつけて勝利した。

つづく1971年の市長選は、同じ山本—中川の顔ぶれが、攻守ところをかえて相まみえた。前市長の中川は、公示3日前の立候補表明で、初当選時の1959年の市長選のような短期決戦を挑んだ。出遅れていた中川に対し、市議の大半が支持をする現職の山本が優勢であった。

中川は「中央直結」を掲げる山本に対し、「中央直結よりも市民に通じる愛情ある市政」を訴えた。市内中心部は中川が強く、周辺部は山本が強いという構図は前回どおりであった。今回は、中川の追い上げが功を奏し、約2千票差の逆転勝利であった。他の愛媛の主要都市の市長選結果をみると、一度落選した元市長が、返り咲きを狙って市長選に立候補すること自体が非常に珍しい¹³⁾。これが、国政選挙と異なるところである。さらに、現職を破って当選を果たしたのは、中川だけといってもいい。

1971年、宇和島市は市制施行50周年を、中川市長の下で祝った。しかし、中川市長は肝臓癌に倒れ、72年2月25日に逝去する。それにともない、後任の市長を選ぶ選挙戦が開始される。71年の市長選で一敗地まみれた山本友一は、返り咲きを狙って3度目の立候補に及んだ。同じ保守系から三好金久も名乗りをあげた。三好は、高等小学校の卒業で、三好造船を経営するに至る。宇和島市の社会福祉協議会長や市商工会議所副会頭も務めていた。政治の世界では、戦後第1回の市議選に33歳で初当選し、その後連続6回の当選を果たした。その間、市議会議長にも就任している。三好は、中川市長の後継者を以って任じていた。

宇和島市では1955年の市長選以来、5回連続で保守系の候補者同士の一騎打ちが行われてきた。今回の市長選には、社会党も21年ぶりに独自候補を擁立した。菊池竜平が社会党公認で立ったのであった。菊池は宇和島商業を卒業後、様々な職を経験する。1951年に社会党に入党し、1959年の宇和島市議選に43歳で初当選し、以後3期連続で市議を務めた。しかし、1971年4月の市

議選では落選を喫していた。

革新陣営も分裂し、共産党も公認候補として稲井勝を擁立した。稲井は高等小学校卒業後、海軍航空隊に入隊する。終戦後の1950年、倉レ西条工場に採用される。ここの労働学園で社会主義思想の洗礼を受け、1953年に共産党に入党する。同年、倉レを退職して党の専従となり、共産党南予地区委員長に就任していた。また、市民の立場から、医師の中井鐸平が立候補した。中井は、同じく医師であり歌人でもあった中井コッフ（本名：謙吉）の三男として生まれた。宇和島中学を経て日本大学医学部に学び、千葉医科大大学院で医学博士号をとった。戦前は東京で小児科医院を開業していた。戦後、宇和島に戻り、父の後を継いだ。

そして、他の5人よりも半日遅れて立候補の届出をしたのが、東京在住の高田巖であった。宇和島市出身の高田は八幡浜高校を卒業後、西宇和郡や八幡浜市内で教鞭をとっていた。退職後、上京し民族派の政治活動に身を投じる。国政選挙から各地の大都市の市長選まで立候補していた、いわば名物男であった。

社会党、共産党は1971年の市議選で候補者がともに全員落選し、市議会に1議席ももっていなかった。自民党と比較すると、地力で相当落ちた。史上最多の6人の候補者という選挙戦ではあったが、実質的には従来どおりの保守系有力2候補による一騎打ちの様相であった。選挙結果は、元代議士・元市長の知名度で勝り、自民党市議15名の支援を受けた山本の圧勝であった。

2度目の市長に就任した山本には、人口15万人からなる大宇和島市構想があり、周辺自治体の編入を模索していた。これは、北宇和郡の各自治体が消極的な中、1974年の宇和海村の編入合併という形で結実した。もう1つ、長年にわたって宇和島市の懸案だったのは、水不足である。宇和島市では、これまでしばしば断水を経験してきた。山本市長は須賀川ダム建設の着手にこぎつけ、ダムは1976年4月に完成した。これにより、宇和島市は慢性的な水不足から解放された。また山本市長も前市長同様の積極的な公共投資を行い、伊達

博物館、闘牛場や市営丸山球場も、1974年に完成していた。

山本市長は市長選の前年の9月に、3選出馬を早々と表明した。一方、革新陣営は、社会党・共産党・地区労・自治労で4者共闘を結成し、旧中川市長派の保守系の人々も引き込み、反山本の「統一戦線」結成を目論んだ。市民の間には、中川市長から山本市長にかわったとたん、市発注の公共事業の入札に成功する土木建築業者が一変したとの噂が流布していた。このような事情が、「統一戦線」の背景には存在した。この反山本陣営から白羽の矢を立てられたのが、食品会社社長の佐藤晴男であった。佐藤は国民学校を卒業後、国鉄に機関士として勤務した。この間、国労役員も務める。1951年、23歳のときに佐藤食品工業所に入社し、同社社長の長女と結婚し、佐藤姓に変わる(旧姓石崎)。岳父の佐藤徳造は1959年から3期、宇和島市議を務めていた。しかし、佐藤晴男自身は、行政および政治経験はまったくなかった。出馬要請を受けた佐藤は、公示2日前に決断し、立候補を表明した。出遅れと、知名度不足の佐藤は、現職の強みをもつ山本の敵ではなかった。大差で山本が3選を決めた。しかし、わずかな期間しか選挙運動にかけられなかったにもかかわらず、三好金久が前回獲得した票を上回った佐藤は、善戦したともいえる。

山本市長は、引き続き活発な建設行政を進めた。地上6階の大規模新市庁舎の建設に着手した。また、宇和島湾の埋め立てを目指し、漁協との間に漁業権の補償交渉を成立させた。一方で、市の建設事業に関して、特定業者ばかりが請け負っていることを問題視する市議、市民も出てきていた。こうした中、1979年末に、宇和島市選出の県議・中畑義生が市長選への出馬を表明する。中畑は、高等小学校卒業後、一代で土木業、砂利採集業などの事業を起こして成功を収めた人物である。46歳のときに、1955年宇和島市議選へ立候補すると、いきなりトップ当選を飾る。4年後の59年には県議選に立候補しこれもトップ当選する。以来県議6期連続当選を果たす。そのうち5回はトップ当選という成績で、選挙に無類の強さを発揮した。70歳を超えて、初の市長選に挑む決意を示したのであった。その中畑に遅れること1ヶ月して、現職の山本

市長も4選出馬を表明する。こうして保守陣営が真っ二つに割れての激しい選挙戦が開始されたのであった。

70代の宇和島政界の長老2人に加えて、32歳の渡辺亨も市長選立候補を表明した。渡辺は都立目黒高校から東京大学法学部に進み、卒業後は小松製作所に就職した。その後、愛媛3区選出で、大洲・八幡浜地域を主たる選挙地盤とする毛利松平代議士の議員秘書をしていた。

革新陣営からは共産党の支援をうけて宇都宮久史が立候補した。宇都宮は東和郡明浜町(現西予市)に生まれ、国民学校卒業後、広島通信講習所普通科、四国普通通信講習所を経て、宇和島電報電話局に勤めた。そこで労働運動に熱心に取り組んだ。選挙に出るのは、これが初めてであった。

選挙戦は、山本一中畑の事実上の一騎打ちであった。この2陣営の選挙運動は、史上稀にみる激烈なものであった。告示前に、買収などの選挙違反で両陣営から逮捕者が出る始末であった。選挙自体は、市議の大半の支持を受け、現職の強みを生かした山本が大差で4選を勝ち取った。しかし、開票作業が始まった直後に、両陣営の選挙運動の責任者が逮捕されるという異常事態になってしまう。

その後も、山本市長自身が公職選挙法違反と収賄の容疑に問われた。また、山本派市議23名と、中畑義生自身および中畑派市議1名も選挙違反で起訴された。その他、運動員を含めると、山本派109人、中畑派148人という前代未聞の大量起訴となった。さらに山本市長には、市の公共事業や清掃工場建設をめぐる収賄容疑ももちあがる。それにもかかわらず、山本市長は当選後、8ヶ月間、市長の椅子に居座っていた。しかし、批判の声に抗しきれず、1981年1月8日、正式に辞任を表明した。山本派市議14名も議員辞職した。残る山本派市議9名と中畑派市議1名は居座りを決め込んだ。このため、出直し市長選と同時にされる市議補選は、14の議席を争うこととなった¹⁴⁾

1960年～70年代の約20年間を、中川、山本が代わる代わる宇和島市長を務めた。この間、2回あった中川・山本の直接対決を含め、つねに保守分裂の激

しい選挙戦が繰り広げられた。一方でこの時期、近代都市建設のため、様々な公共施設が宇和島市に建設された。しかし、その公共事業に関して、請負業者と市政担当者との間で、疑惑をよぶような関係がつくられた。中川市政を「不明朗市政」と批判して市長となった山本本人が収賄容疑に問われることによって、それが一部明るみになることになった。保守分裂の激しい選挙戦の背後には、公共事業の受注にまつわる行政と業者の特殊な関係があったことが伺われる。

活発な公共事業と裏腹に、企業誘致は進まなかった。そのため60年代の高度成長期には、南予の中心都市でありながら宇和島市は人口流失に見舞われた。しかし、真珠やハマチなどの水産養殖業が民間主導で勃興し、70年代を通じて急成長を遂げた。水産養殖業は、宇和島市内ばかりではなく、隣接する南宇和郡でも発達し、宇和島圏域全体を潤した。その中心都市として宇和島市の人口は、70年代には微増に転じるのであった。

2-3 緊縮財政と衰退の兆し～菊池市政

現職市長および24名の市議が公職選挙法違反で起訴されるという、宇和島市はもとより、愛媛県史に残る事件の結果、市政再生をかけた出直し選挙が1981年2月に行われることとなった。市長選への出馬が噂されたのは、まず県議2期連続当選の土居幸治、同じく県議2期の三浦雅夫の自民党県議たちであった。さらに保守系からは、1980年5月から助役に就任していた柴田勲と産婦人科医の今松徹の名があがっていた。今松は、衆院愛媛3区で通算5回当選の元総務庁長官・今松治郎の甥にあたった。今松徹は、1967年の県議選挙和島市選挙区に立候補するも、次点で落選を経験していた。そして、1976年市長選に立候補していた佐藤晴男、同様に1980年市長選に立候補した宇都宮久史の両者も出馬が取沙汰された。

この中、最も早く出馬を表明したのは、菊池大蔵であった。菊池は旧制宇和島中学を卒業後、都立九段高校を経て東京大学経済学部に進学した。卒業後、

いったんゼネラル物産に務め、1961年に家業の酒造会社の経営に携わるために宇和島に戻った。36歳で出馬した1967年の市議選では青年会議所の成員の支援によって、いきなりトップ当選を果たす。しかし、市議は1期かぎりですぐ退いた。1976年、1980年の市長選では、革新陣営から出馬の打診を受けていた。

次に出馬表明を行ったのが、三浦雅夫であった。戦前、陸軍士官学校に進んだ三浦は、戦後は市内で農業を営んでいた。1967年の市議選で、菊池大蔵とともに初当選する。4年後の統一地方選では県議選に鞍替えするも落選する。しかし、75年、79年と県議に連続当選を果たしていた。現職自民党県議である三浦は、出馬表明するとともに、自民党宇和島支部に推薦願を提出した。

この三浦の出馬表明を受け、同じ県議の土居幸治は立候補を見送る方向に傾いた。同様に、助役の柴田勲も立候補を見送る決意を固めた。当初、保守系の最有力候補と目されていたのは、他ならぬ柴田であった。しかし、白石春樹知事の斡旋による山本友一・中畑義生両者の手打ちが最終的に失敗し、保守系候補の一本化の目処が立たなくなると、柴田は出馬の意欲をなくしたのであった。候補者調整をうまく進めることのできなかつた自民党県連宇和島支部は、総務会を開き、支部4役および総務会の成員120名の辞任が取り決められ、市長選は自主投票との決定がなされるのであった。

その他に保守系で出馬を噂されていた今松徹は、すでに出馬表明した菊池・三浦の両人が、叔父の今松治郎代議士派であったこともあり、今回は見送ることを表明した。

社会党、共産党などの革新陣営は、これまで2回の市長選で、菊池大蔵に出馬を打診してきた経緯から、菊池推薦を視野に入れていた。しかし、立候補表明後の菊池は、社共両党と距離をおく姿勢を示し、ついには保守系無所属という立場で立つことをあきらかにする。困惑した社共両党は、他の革新統一候補擁立の道も模索し、宇都宮久史の名前もあがった。しかし、次第に市議補選における自党候補者の選挙に、それぞれ力を注ぐという方向に落ち着いていった。

こうして、多くの人間の名前が市長選候補者としてあげられる中、菊池一三浦の2人にしぼられたかのようにみえた。その時、告示5日前になって、突如、藤田啓啓が立候補を表明した。藤田は、元県議で1963年の市長選にも立候補した藤田定吉の実子である。同志社大学経済学部を卒業後、大王製紙に勤務していた。44歳で総務部長になった後、兵庫パルプ工業取締役に転出していた。高校卒業後は宇和島を離れていたのだが、急遽兵庫からもどり支援者との会談に臨んだ。逡巡の結果、告示間際の出馬となったのであった。

選挙戦で優位に立っているとみられたのは、菊池である。出身の青年会議所、商工会議所の若手などが支援し、愛媛3区選出の毛利松平代議士の後援会組織や土居県議も協力する体制をつくった。また市議4名を擁する公明党の他、社会党、地区労の支持も得て、組織的には大きく他の候補者に差をつけた。さらに、東大卒という「知性派」の看板は、「市政刷新」を望む市民層の期待を集めた。

三浦は、出身母体の農協をはじめ、漁協など第1次産業従事者を中心に草根選挙をすすめた。自他ともに出遅れとされていた藤田陣営は、父の藤田定吉の支持者や出身の九島を中心に、短期決戦で巻き返しをはかった。また、愛媛3区選出の元代議士・阿部喜元の後援会組織も藤田支援で動いた。

開票が始まると、3者がならぶ大接戦となった。最終的には、わずか434票の差を三浦につけて、菊池が当選した。それだけ、三浦・藤田の両候補の追い上げが激しかったということである。最後は、組織力のちがいがものをいう結果となった。

菊池市長は、財政の健全化や職員採用および人事の公正化を掲げ、宇和島の新生に向けて出発した。緊縮財政の中、菊池市長は1期目の任期中に、懸案だった清掃工場と廃棄物最終処分場の建設を成し遂げたのであった。

1985年に予定される市長選に向けて、現職の菊池市長と前助役の柴田勲が立候補する構えをみせた。柴田は、宇和島商業を卒業後、宇和島市役所に入る。財政課長、総務部長などを歴任し、山本市政の4期目に助役に就任した。

就任したとたん、山本市長が選挙違反および収賄の容疑で起訴されるという市政の混乱状態に直面する。その中で、市長職務代理者として市政運営にあたった。その後、出直し選挙で当選した菊池市長の下でも助役を務めた。しかし、菊池市長の下で2年3ヶ月たったところ（1983年5月）で、柴田は助役を辞任していた。自民党宇和島支部は一本化の調整に入ろうとした。しかし、柴田がこれを拒否し、両陣営は、1984年末から実質的な選挙戦になだれこんでいった。

菊池は自民党の推薦を受け、宇和島市選出の3自民党県議と17市議に支援を受け、前回よりも保守色の濃い布陣となった。菊池市長は前回市長選で、市内の若手経営者などの支持を受けて当選した。山本・中畑に代表される旧勢力は退場を余儀なくされた。しかし、元市議や市職員の退職者などの旧勢力は柴田を推した。また前回、菊池支持で動いた公明党が、柴田支持に回った。同じく前回菊池支持の社会党は分裂し、宇和島自動車労組は菊池支持、柴田の実兄である社会党市議の秋月正之と官公労は、柴田を支援した。

結果は、保守勢力の固い組織と「清潔」な市政を支持する市民層の支持を集めて、柴田市長が9千票の大差でもって再選を果たした。

混乱を極めた宇和島市政を引き継いだ菊池市長は、それまでの公共事業推進の体制からうってかわって緊縮路線をとった。市職員数の削減にも取り組んだ。その背景には、1980年代が、国の旗振りで地方行革が進められた時代であったということもある。また、企業誘致が進まなかった宇和島市では、税収の伸びが期待できなかったという事情もあった。そうした緊縮策をとっても、清掃工場などの必要不可欠な施設建設があったため、公債依存度は高まるばかりであった。この時、頼みの水産養殖業も魚価の低迷などで翳りがみえるようになった。それとともに、1980年代初めから人口が再び減少に向かうようになった。宇和島市は、あきらかに衰退への道を辿りだしたのであった。

2-4 人口減少と水産業の翳り～柴田市政

1988年9月、産婦人科医の今松徹が、翌年の宇和島市長選に出馬することを表明した。今松は1982年の出直し市長選時にも立候補が取沙汰された。今回、初めての出馬表明となった。翌日、現職の菊池市長が、市議会で質問に答える形で3選出馬を表明した。両陣営は、自民党県連に対して推薦願いを提出した。自民党宇和島支部は、今松推薦を決議する。しかし、これに菊池系市議が反発する事態となった。こうして、またもや保守分裂の抗争がはじまりような気配が漂った。その最中、突如、今松が東京で飛び降り自殺をはかり、重体となる事件が発生した。この事件を契機に、保守陣営は菊池一本化の方向に至った。

保守が一本化したため、菊池市長の無投票3選の観測もながれた。しかし無投票3選に反対する共産党と共産党系の市民団体は、1989年の1月に入ってから「宇和島市政をよくする市民の会」を立ち上げ、市長候補として坂尾真の擁立を決定した。坂尾は、宇和島東高校から中央大学へ進学した。中大卒業後、1976年に宇和島の民主商工会に入った。立候補時には民商事務局長を務めており、40歳であった。坂尾の実父である坂尾重夫は、社会党愛媛県連副会長を務めたことがあり、1959年の宇和島市議選において無所属で当選していた。

こうして保守-革新の一騎打ちかとみられた選挙戦の告示前日に、前回市長選で敗れた柴田勲が急遽、立候補を表明した。選挙は三つ巴となった。菊池市長の陣営には、中畑保一、中川鹿太郎という宇和島市選出の両自民党県議がつき、さらに13名の自民党市議も支援した。これに対し、反菊池派の自民党市議9名が中心となって、柴田を担ぎ出したのであった。前回市長選で柴田を支持した公明党は、今回は自主投票に転じた。柴田の実兄の秋月社会党市議は柴田支援で動いたものの、社会党自体は自主投票で臨んだ。

選挙戦は終盤に入っても、現職の有利という見方が大勢を占めていた。しかし、これが菊池陣営の緩みとなった。一方の柴田陣営は、反菊池票を懸命に掘

り起こした。ふたを開けてみると、大番狂わせで柴田の当選であった。568 票差という僅差での決着であった。優勢を伝えられた菊池の選挙活動が上滑りした上、水産業の低迷や人口の減少が続く中で、柴田の「市政の流れを変えよう」という訴えが、保守浮動層に響いたのではないかとされた。

1993 年 1 月の市長選は、早くも前年の 6 月に柴田市長が再選出馬を表明し、自民党・民社党は推薦、公明党は支持を打ち出した。市内の各種団体も柴田を支持し、磐石の態勢を築いた。その結果、無投票で柴田の再選が決まった。市長選において、有力な保守系候補同士が激突することが多い宇和島市では、この市長選が今のところ唯一の無投票当選となっている。

つづく 1997 年の市長選には、三浦雅夫が立候補した。三浦雅夫は 1981 年の出直し市長選で惜敗して以後、1983 年の県議選で再び落選を経験する。87 年県議選で雪辱を果たすも、91 年、95 年と連続して落選していた。今回、実に 16 年ぶりの市長選出馬となった。市議に初当選して以来、通算 10 回目の選挙であった。

柴田は、前回同様、自民党・公明党の支援を受け、市内の各団体からの支持も集めた。一方の三浦は、立候補表明が選挙の 1 ヶ月前と出遅れた。さらに、県議選でも落選続きの 70 歳の候補者では、新鮮味に欠けた。現職有利の下馬評の中、市民の関心は低く、低調な選挙戦に終始した。投票率は、過去最低だった 8 年前の市長選を 23 ポイントも下回り、50.2%と、宇和島市長選史上最低を記録した。結果は、大差で柴田市長の 3 選であった。

柴田市長も、菊池市政と同様に、緊縮財政と行政改革路線を進めざるを得なかった。柴田市政下で新たに健全化が目指されたのが、市土地開発公社と宇和島住宅協会の不良債務 160 億円であった。柴田市政は、「公債費負担適正化計画」「財政健全化計画」など、財政再建にあけくれ、市職員数の削減も進めた。ちなみに、柴田市長と同時期に、同じ南予の八幡浜市政を担ったのは吉見弘晏（在任：1991 年 4 月～1999 年 4 月）であった。吉見市長は、収益性に疑問のある観光開発や、必要性の薄い余暇施設の建設のために市の資金を振り向け、

いっそうの市財政悪化を招いた¹⁵⁾。このような八幡浜市政と比較すると宇和島市では、はるかに強い危機感がもたれて、財政再建への取り組みがなされていたようにみえる。だが不幸なことに、柴田市政の3期目の1994年に、アコヤ貝の大量斃死が南宇和郡内海村で起こるといふ事件が発生した。その後、大量斃死は宇和海全体に広まり、宇和島市の真珠生産も大打撃を受けることになったのである。地域全体の疲弊が進んでしまった。

2-5 財政再建と市町村合併～石橋市政

柴田市長は3期限りでの引退を表明した。2000年代の宇和島市長を決める2001年1月の市長選には、石橋寛久、中川鹿太郎、浦瀬明の3人が立候補した。石橋は、宇和島東高を卒業後、北海道大学に進んだ。大学卒業後、総合商社に入社し、海外勤務の経験も豊富にもった。その後、家業を継ぐために宇和島市へ帰郷した。1995年に宇和島市議選に立候補し、初当選を飾り、99年にも再選されていた。石橋は、宇和島市選出の自民党県議・仲田中一や自民党市議団から支援を受け、加戸知事も支持を表明した。さらに、連合愛媛の推薦を受け、選挙体制づくりで優位に立った。

これに対する中川鹿太郎は、宇和島市長であった中川千代治の実子である。50歳の石橋に対し、51歳の中川も、同時期に宇和島東高で学んでいる。同校卒業後、南カリフォルニア大で学んだこともあった。政治経験は石橋よりもはるかに豊富で、早くも25歳で宇和島市議に初当選している。市議2期連続当選した後、山本市長辞任にともなう出直し市長選と同時に行われた県議補選で無投票当選で県議となる。以後、この補選を含めて県議6回連続当選を果たす。この間、戦後生まれとしては初めての県議会議長に就任し、自民党県連の幹部の1人となった。しかし、現職の伊賀貞雪知事と新人の加戸守行に、保守が分裂して争われた1999年の県知事戦において伊賀知事の支援にまわり、自民党県議団から離脱することになる。この市長選に、県議を辞任して臨んできた。

浦瀬明は、宇和島東高卒業後、宇和島市役所に入った。市役所では企画調整課長、産業部長などを経て助役に登り詰めていた。そして、中畑保一県議と保守系無所属市議の支援を受けて、市長の座を目指したのであった。

民間出身の石橋、政治家人生を歩んだ中川、行政一筋の浦瀬と、三者三様の候補者による三つ巴の選挙戦となった。石橋は「変えよう宇和島」を掲げ、争点となった市立宇和島病院改築問題に関しては、市内中心部または現在地での改築という方針を示した。中川は産業振興を説き、市立病院に関しては移転含みの立場であった。浦瀬は40年間の市職員として行政経験をもとに「歴史文化のまちづくり」を掲げた。

選挙は接戦となった。最後は、石橋が抜け出し、初当選を飾った。石橋は他の2人よりも優勢な支援体制を得られたことと、変革を求める宇和島市民に民間出身の経歴と若さが好意的に受け入れられたことなどが勝因となったとされている。

石橋市長は、財政再建に取り組み、各種の財政指標を改善させる実績を残した。また、市立宇和島病院の改築に関しても、公約どおり現在地での改築に道筋をつけた。一方、すでに述べたように、宇和島市・津島町・吉田町・三間町の合併協議は曲折を経ることになった。最大の問題は津島町側の姿勢であった。合併協議が行われている最中に、津島町は町の建設事業を急拡大し、財政調整基金を使い切るかのような動きをみせた⁶⁾。この津島町の施策に対し、石橋市長は疑念を顕わにし、合併協議会からの離脱を表明した。合併の核となる宇和島市の離脱表明の結果、2004年6月以降、合併協議会が休止状態に陥るしかなかった。愛媛県は、市町村合併を強力に推進しており、宇和島市の合併協議会離脱は、県側の不興を買ったとされる。宇和島市と愛媛県の関係悪化が取沙汰されることとなった。

2005年1月、石橋市長の任期満了にともないに市長選が行われることとなった。合併協議会離脱後、宇和島市はそれに復帰し、2005年8月に1市3町の新設合併によって新市が誕生することが決まっていた。このため、この市

長選はわずか8ヶ月ほどの在任期間の市長を決めるための選挙となった。この選挙に中川鹿太郎が再度挑んできた。中川は、初めての落選を経験した前回市長選以降、次の市長選をにらんで宇和島駅前で立立ちをするなど、早くから準備を進めてきた。また中川は、閉塞感漂う石橋市政下の宇和島に対し、積極的な市政の展開を訴え、中畑保一県議と市議8人の支援を得た。また産業振興を掲げる中川を、市内7漁協も支持した。

これに対して現職の石橋市長は、自民党宇和島支部の市議8人から支援され、連合愛媛および民主党も石橋支持で動いた。石橋は、中川とは反対に、費用対効果を考えた事業選別による堅実路線を訴えた。合併問題を契機とした県との関係悪化が響いたのか、前回石橋支持だった加戸知事および仲田中一県議は、今回は中立的な立場に回った。

選挙は、停滞する宇和島経済への不満をもつ層に支持を広げた中川の優勢に進んでいるかにみえた。しかし、財政再建の実績を訴える現職市長が、最後は地力を発揮して再選を勝ち取った。

2005年8月、宇和島市は、吉田・三間・津島の3つの町と対等合併し、新宇和島市が誕生した。「平成の大合併」としては、愛媛県内で最後の合併となった。この合併にともない、新市長を選出するための市長選が行われることになった。ほぼ同時期に、郵政民営化の可否を巡って衆議院が解散されており、宇和島市では、新市長選、新市議選、衆院選のトリプル選挙として執り行われることになった。市長選では7ヶ月前と同様に、旧市の市長だった石橋が立候補するとともに、前回惜敗した中川鹿太郎も3度目の挑戦を表明する。石橋市長は、自民党宇和島支部の前市議の大半と旧三間町長の太宰仁三に支援された上、前回同様連合愛媛と民主党愛媛県連の推薦も受けた。一方の中川陣営には、7ヶ月前の市長選と同じく、漁協関係者がついた。停滞する宇和島経済の活性化を掲げ、緊縮財政をとってきた石橋市政を批判した。

石橋・中川の両名に加えて、宇和島市議だった梶山義将が遅れて立候補表明したため、三つ巴の市長選となった。梶山は、宇和島東高を卒業後、上京して

東京経済大に進むが中退する。その後、東京での会社員生活を経験し、1981年に宇和島市に戻り、新聞販売所長となる。1991年に宇和島市議会に初当選し、以後4期連続当選を飾る。3者の中では一番若い52歳であった。梶山の出馬は遅れ気味だった。しかし、愛媛4区選出の自民党代議士・山本公一が梶山を支援した。さらに、前津島町長の赤松伝雄および北宇和郡選出の自民党県議・高山康人も梶山支持で動いた。県との関係悪化がいわれる石橋市長に対し、代議士、県議の支援を受けた梶山は、「国や県とのパイプ」を強調した。

石橋は現職の強みを発揮し、中川に3千票あまりの差をつけて新市の初代市長となった。中川にとっては、梶山の出馬により、石橋批判票が分散してしまったことが響いた。

石橋市長は、菊池・柴田と行われてきた緊縮財政路線を受け継ぎ、財政再建を最優先させ、着実に改善の方向へもっていった。懸案となっていたのが、九島架橋とごみ焼却場建設であった。ごみ焼却場は、候補地周辺の住民の反対が強く進展がみられずにいた。島民の悲願とされた九島架橋は、架橋とともに島内に廃棄物最終処分場を建設する計画で、住民の理解も得られていた。しかし、折からの公共事業抑制の波の中で、国や県に実現への動きが見られずにいた。島民千人の島への架橋に、総事業費60億円以上が見込まれる事業に対しては、市民の間にも疑問の声があり、次期市長選の争点の1つとなっていた。

2009年8月の宇和島市長選も、市議選・衆院選とのトリプル選挙となった。新市の市長再選を目指す石橋市長は、早々に立候補表明をし、自民党宇和島支部および中畑・高山・毛利・赤松の宇和島市・北宇和郡選挙区選出の自民党4県議¹⁷⁾の支援に加え、各種業界団体の推薦も得て、圧倒的に有利な選挙態勢を組んだ。これに対し、武田元介が市長選出馬を表明した。武田は、宇和島東高を卒業後、岡山大に進む。大学卒業後、食品製造業の加ト吉に入社した。その後、家業の食品製造会社を継ぐために宇和島に帰郷する。それと同時に青年会議所の活動に参加し、1994年には宇和島青年会議所理事長に就任し

ていた。48歳の武田は、青年会議所OBなどに支援され、市役所の行政改革を第1の公約に掲げた。職員給与の見直しや市長退職金の削減に言及して、選挙戦を戦った。

そこにもう1人、石橋に3度敗れた中川鹿太郎が、告示直前の7月になって急遽、立候補を表明した。こうして、石橋と中川の顔合わせによる4度目の選挙戦が行われることになり、また前回に続いての三つ巴の選挙戦であった。しかし衆目の見るところ、実質的には石橋—中川の一騎打ちであった。石橋は財政再建などの実績を強調し、懸案の九島架橋には早期着工を目指すという立場をとった。中川は、産業振興・企業誘致を公約に掲げ、九島架橋については優先度が低いとして、見直しという立場であった。結果は、突然の立候補の中川に対し、準備を重ねてきた石橋の勝利であった。背水の陣の中川は、「4度目の正直」がなかった。中川が立候補した4回の市長選の中で最大の約6千票差をつけられての完敗であった。

石橋市長は、誰が市長になっても難しい時期に、その地位に就いた。その中で、財政再建に実をあげてきた。しかし、行革を進めれば、市の貴重な雇用が減少し、公共事業の削減も地域経済を冷した。こうした二律背反的な状況の中で、石橋市長は市政の舵取りをせまられたのであった。石橋市長の対立候補として4度市長選に立候補した中川鹿太郎は、対照的に積極財政と開発路線を掲げて市長選を戦った。しかし、市民は4度とも石橋市長の堅実路線を支持したのであった。

3 宇和島市議会

保守的とされる南予に存する宇和島市議会の特徴は、保守合同直前の1955年と、市町村合併の直後の2005年の市議選を除いて、つねに保守政党の公認候補が数多く当選を果たしてきたことである。そのため、人口10万人以下の都市としては、きわめて例外的に政党化が進んだ市議会となってきた。

すでに述べたように、宇和島市議会史上最大の事件は、1980年の山本市長

と中畑義生が争った市長選にからんで山本派市議 23 名と中畑派市議 1 名が選挙違反で起訴されたという事件である。起訴された市議のうち 14 名が議員辞職し、1 名が県議補選に回ったため、合計 15 議席を争う市議補選が 1981 年 2 月に行われた。この補選は 18 名が立候補して争われた。保守系の候補者は、さすがに自民党公認での立候補がはばかられたのか、16 名全員が無所属で出馬した。それに加えて、社会党、共産党が 1 名ずつ候補者を擁立した。社共両党の候補者は当選を果たし、両党とも現有議席を 1 から 2 に増加させた。一方、保守系は、補選を契機に世代交代が進んだ。しかし、保守系で当選した 15 名中 6 名は建設業者であった。

自民党が圧倒的に強かった宇和島市議会において、社会党・共産党の革新勢力の議席はわずかな数にとどまった。1951 年に、社会党公認市長が宇和島市に生まれていたのにもかかわらず、市議会に社会党が初議席を得たのは、なんと 1959 年のことであった。議席数としては、常に公明党の後塵を押し、時には共産党以下となることもあった。現在は、1 議席を維持するのがやっとという党勢である。

共産党は、戦後第 1 回の市議選で 1 議席を獲得している。しかしその後、空白期間をつくる。1959 年に議席を再び奪取し、1981 年の出直し市議選をきっかけに 2 議席に議席数を増やし、1999 年までそれを維持した。現在は 1 議席の

表 7 宇和島市議会議員選挙の党派別当選者数

	47	51	55	59	63	67	71	75	79	83	87	91	95	99	03	05	09
定数	30	30	32	36	30	30	30	33	33	30	30	28	28	27	25	30	28
愛媛民主党	15																
自由党	1	12	5														
自由民主党				16	12	18	20	23	21	15	20	14	17	12	16	5	16
社会(社民)党				1	2	1			1	2	2	1		1	1	1	1
公明党					3	3	3	4	4	4	4	3	3	3	3	4	3
共産党	1			1	1	1		1	1	2	2	2	2	1	2	1	1
無所属	13	18	27	18	12	7	7	5	6	7	2	8	6	8	3	19	7

獲得に留まっている。

公明党は、他の自治体と同様に、1963年に初めて市議会に進出した。この時、社会党・共産党を上回る3議席をいきなり獲得し、以後、3～4議席を着実に得ている。

2005年、宇和島市・吉田町・三間町・津島町が合併した。先行して市町村合併した愛媛県内の自治体では、市議らの在任特例が市民の批判を呼び、市議会が自主解散に追い込まれる事例もあった。こうした事情もあり、宇和島市では在任特例を適用しないこととした。議員の定数は、旧宇和島市25名、旧津島町・旧吉田町・旧三間町が各16名で、合計73名であった。合併後の新市の定数は30名と定められ、半分以下に減ることとなった。また、選挙区制を用いず、全市1区での選挙が行われた。当選者を旧自治体別に見ると、旧宇和島市17名、旧津島町6名、旧吉田町5名、旧三間町2名が当選を果たした。

新市第1回目の市議選では、自民党公認で立候補する候補者が大幅に減った。これは今治市でもみられた現象である。しかし、今治市とは異なり、新市2回目の市議選では、自民党公認候補が急増し、定数28名中16名を自民党市議が占めることとなった。しかも、この市議選は民主党が政権交代を果たした総選挙と同時にこなわれている。自民党王国・宇和島の面目躍如といったところであろうか。

4 結：名望家による土建行政から実務家による財政再建路線へ

宇和島市長選の特徴は、無投票で当選が決まったことが1度しかなく、さらに現職市長に対する立候補者が共産党公認（または推薦）候補1名のみという実質的な信任投票が1度もなかったことである¹⁸⁾ さらに、現職市長5名（国松福祿・中村純一・中川千代治・山本友一・菊池大蔵）が落選の苦汁を嘗めているということからも、常に激しい選挙戦が行われてきたということがうかがわれる¹⁹⁾

この宇和島市の市政は、1981年の山本友一市長の収賄・選挙違反による辞

任以前と辞任以後とに、大きく分けることができる。前期の国松福祿・中平常太郎・中村純一・中川千代治・山本友一という歴代市長たちは、中村を除いて戦前から宇和島市および北宇和郡の政界・経済界で活躍してきた地方名望家たちである。中村純一の場合、自身は戦前において中央省庁で活躍していた。しかし中村も、戦前の宇和島市長だった高島亀太郎と血縁関係があり、宇和島の名望家に連なるものであった。

前期の宇和島市政では、南予の中心都市にふさわしい近代都市建設が志向され、様々な公共事業が行われた。それと比較して、工場誘致は遅々として進まなかった。狭い土地、水不足、市場からの距離など、数々の地理的な悪条件も災いした。しかし、広い四国西南部を商圏とする第3次産業と急成長した水産養殖業が、この時期の宇和島市を支えた。一方、盛んに行われた公共事業は、市長周辺と建設業者との間に特殊な関係をつくり出した。保守分裂の激しい市長選が展開された要因の1つに、この建設業界と市長（候補）とのつながりを指摘することができよう。こうしたことが白日の下にさらけだされたのが、1981年市長選だった。

後期は、菊池大蔵・石橋寛久といった民間出身のUターン組と市役所の叩き上げの柴田勲が市長になっている。前期の名望家市長たちとは打って変わった出自の市長たちが市政を担った。中川鹿太郎の4度の挑戦が、石橋寛久によって撥ね返されたため、宇和島市に2世市長は誕生しなかった。しかし一方で、中川千代治市長－中川鹿太郎県議、中畑義生県議－中畑保一県議、山本友一市長（県議・衆院議員）－山本公一衆院議員（県議）といった親子関係にみられるように、宇和島市選出の有力政治家に世襲の者が輩出している状況があり、政治エリートの特定の家系への固定化の兆しもみえる。

前期と後期とでは、市政の基本路線も大きく変化した。菊池市政以降の宇和島市の最重要政策課題は財政再建であり、前期とは一転して緊縮財政と行政改革が基調となった。第1次産業の低迷し、人口が減少する中で、3代の市長によって市政の建て直しが進められた。この間の努力によって、財政再建には一

定の成果が得られた。しかし、上向く気配のない第1次産業、「煙突のない街」と称される製造業の現状、圏域全体の疲弊による第3次産業の衰退には、打開の糸口すらつかめぬ状況である。

これまでの宇和島市は、自他ともに認める南予の中心都市、四国西南部の牽引役であった。しかし、産業の衰退により、その優越的な地位は揺らいでいる。高速自動車道の整備は、宇和島市に人を呼び込むことにはつながらず、むしろ購買力や人口の流出に拍車をかけることが予想される。こういう状況の中で、過大な投資に走らず、堅実な市政運営を続けてきた80年代以降の歴代市長の政策は、正しい選択であったといえよう。今後は、歴史、風土、伝統行事、伝統食などを生かし、身の丈にあったまちづくりを行うことによって地方の一小都市として存在していくことを模索する時期なのではないだろうか。

注

- 1) 『宇和島市誌 上巻』P.368
- 2) 「宇和島市を単的にあらわすことばとして、「煙突のない町」といわれてきた」(『宇和島市誌 上巻』P.558)
- 3) 「宇和島の商業経済圏は、宇和島市を中心として、東宇和郡南部・北宇和郡・南宇和郡にわたる南予の大部分と、さらに高知県南西部におよぶ広範囲な地域となっている」(『宇和島市誌 上巻』P.568)
- 4) 鬼北地域は、三間町・広見町・松野町・日吉村を指し、宇和島市の鬼が城山の北の地域という意味から発した名称である。
- 5) 井上源一の戦前の市長時代に関しては、川東埤弘『高島亀太郎伝』P.126～127およびP.148～149、『宇和島市誌 上巻』P.268～271参照。
- 6) 中川鹿太郎は、戦前の第1回宇和島市会議員選挙に当選して以来、連続4期務め、市会議長にも就任した憲政会一民政党系の政治家。
- 7) 第1回参議院選挙 地方区(愛媛県)1947年4月20日(投票率61.6%)

当 久松 定武(愛媛民主党)	204,780 票
当 中平常太郎(社会党)	101,155 票
梶原 計国(救国社会党)	41,116 票
山口 乾治(無所属)	37,580 票
松本新八郎(共産党)	24,008 票
高岡 福重(愛媛民主党)	16,152 票

8) 愛媛県知事選挙 1951年4月30日(投票率88.72%)

当 久松 定武(無所属)	280,809票
佐々木長治(自由党)	278,168票
青木 重臣(自由党)	147,864票

9) 高島亀太郎に関しては、川東埜弘『高島亀太郎伝』参照のこと。1955年市長選への高島擁立工作に関しては、同書P.313~314に記述がある。

10) 中村純一の衆院選(愛媛3区)結果

第23回 1947年4月25日(投票率70.3%-県全体)

当 井谷 正吉(社会党)	32,939票
当 高橋 英吉(自由党)	32,841票
当 明礼輝三郎(自由党)	22,456票
布 利秋(民主党)	21,858票
薬師寺岩太郎(自由党)	20,944票
中村 純一(民主党)	19,988票
青木 繁吉(国民協同党)	13,305票
上木 即審(自由党)	9,620票
若松 齡(共産党)	6,067票
梶田 広貞(愛媛民主党)	2,968票
松山 武文(無所属)	2,290票

第24回 1949年1月23日(投票率76.4%-県全体)

当 高橋 英吉(民主自由党)	37,802票
当 薬師寺岩太郎(民主自由党)	35,410票
当 中村 純一(民主自由党)	30,859票
明礼輝三郎(民主自由党)	25,445票
井谷 正吉(社会党)	23,860票
渡辺 百三(民主自由党)	19,357票
布 利秋(民主党)	13,379票
清水 省三(共産党)	9,434票
中川千代治(民主党)	7,684票
梶原 計国(国民協同党)	3,110票

第25回 1952年10月1日(投票率80.6%)

当 今松 治郎(自由党)	47,009票
当 高橋 英吉(自由党)	35,477票
当 明礼輝三郎(自由党)	34,807票

井谷 正吉 (左派社会党)	34,194 票
薬師寺岩太郎 (自由党)	29,193 票
中村 純一 (自由党)	24,365 票
毛利 松平 (改進黨)	16,168 票
清水 省三 (共産党)	2,845 票
清水 栄 (協同党)	2,509 票

11) 山本友一の衆院選結果

第26回 1953年4月19日 (投票率79.4%)

当 井谷 正吉 (左派社会党)	52,921 票
当 山本 友一 (自由党)	45,925 票
当 高橋 英吉 (自由党)	40,396 票
今松 治郎 (自由党)	38,394 票
明礼輝三郎 (自由党)	34,941 票
毛利 松平 (改進黨)	12,010 票

第27回 1955年2月27日 (投票率79.5%)

当 今松 治郎 (民主党)	56,084 票
当 山本 友一 (自由党)	40,518 票
当 井谷 正吉 (左派社会党)	38,254 票
毛利 松平 (民主党)	35,565 票
高橋 英吉 (民主党)	31,322 票
山田正太郎 (無所属)	27,071 票

第28回 1958年5月22日 (投票率86.5%)

当 高橋 英吉 (自民党)	53,896 票
当 毛利 松平 (自民党)	53,298 票
当 今松 治郎 (自民党)	49,916 票
山本 友一 (自民党)	49,612 票
井谷 正吉 (左派社会党)	37,330 票
阿部 喜元 (無所属)	7,043 票
岩井 元佑 (共産党)	1,031 票
清水 栄 (革新自由民主党)	143 票

12) 今井琉璃男によれば、「三区でも山本友一は自民党幹事長益谷英次、佐藤栄作らに説得されて再出馬を断念し、事業に専念すると表明した」(今井, P.181) というような事情があったという。

13) 松山市では、3選した市長の黒田政一が、1963年に宇都宮孝平に敗れ、67年に返り咲

- きを狙って立候補するも落選している。西条市では変則的であるが、1951年に文野俊一郎を退けた岡本達一が、1期あけて59年に立候補するも文野に敗れて落選する。文野死去にともなう同年12月の市長選に再び咲きを狙って立候補するも再度落選している。
- 14) 現職県議の三浦雅夫が出直し市長選に立候補するため、県議を辞職した。それにともない、県議の宇和島市選挙区では、同時に補選が行われることになった。この県議補選に現職宇和島市議の中川鹿太郎が立候補するため、市議を辞職した。結局、市議補選は15議席を争うことになった。
- 15) 吉見市政に関しては、拙稿「港湾都市の政治」P.173～174参照。
- 16) 真珠販売の不振で経営難に陥った津島町下灘漁協が、愛媛県信用漁協連合会から14億円を借り入れようとした。連合会は貸し出しの条件に津島町の損失補償を要求した。これが、合併協議会で新市への借金持ち込みと受け取られるという一幕もあった。
- 17) 「平成の大合併」にともなう市町村域の変更と定数は正のため、2007年の愛媛県議会議員選挙は、大幅に選挙区割りを再編した上で行われた。宇和島市（定数2）は、北宇和郡（定数2）と合区され、定数4となった。宇和島市選出の現職県議2人のうち、仲田中一は引退して立候補しなかったため、旧宇和島市からは中畑保一のみが立候補となった。旧北宇和郡からは、現職の赤松泰伸・高山康人の両名とともに、前回落選していた元職の毛利修三が立候補した。結局、他に立候補者がいなかったため、無投票でこの4名が当選した。
- 18) 松山市長選と新居浜市長選は、これまで無投票だったことはない。しかし、松山市は5回、新居浜市は3回、実質的には現職市長の信任投票というべき選挙があった。
- 19) 愛媛県内の主要都市で、宇和島市に次いで現職市長の落選の多い市が、今治市（山本幸助・田坂敬一郎・羽藤栄一・越智忍）と八幡浜市（魚本義若・平田久市・吉見弘晏・高橋英吾）で、それぞれ4名いる。しかし両市とも、それ以外では無風状態の市長選も多く、今治市は無投票で当選者が決まったことが3回、実質的な信任投票が3回ある。八幡浜市では無投票の市長選8回を数える。

参 考 文 献

- 市川虎彦，2010，「港湾都市の政治」『松山大学論集』第22巻第3号
 今井琉璃男，1966，『愛媛県政二十年』若葉社
 宇和島市誌編纂委員会編，2005，『宇和島市誌』上・下宇和島市役所
 川東輝弘，2004，『高島亀太郎伝』ミネルヴァ書房

付 1. 宇和島市長選の記録

- 第1回 1947年4月5日（投票率74.7%）
- | | |
|------------|---------|
| 国松 福祿（自由党） | 6,256 票 |
| 中川千代治（自由党） | 5,369 票 |

清家 栄 (社会党)	2,940 票
井上 源一 (自由党)	2,867 票

第1回 決選投票 1947年4月15日 (投票率63.9%)

当 国松 福祿 (自由党)	7,904 票
中川千代冶 (自由党)	7,899 票

第2回 1951年4月23日 (投票率95.2%)

中平常太郎 (社会党)	10,144 票
国松 福祿 (自由党)	9,435 票
佐々木 饒 (自由党)	8,703 票

第2回 決選投票 1951年5月6日 (投票率85.7%)

当 中平常太郎 (社会党)	14,869 票
国松 福祿 (自由党)	10,993 票

第3回 1955年4月30日 (投票率91.4%)

当 中村 純一 (無所属)	17,127 票
中川千代冶 (無所属)	15,522 票

第4回 1959年4月30日 (投票率87.8%)

当 中川千代冶 (無所属)	22,561 票
中村 純一 (自民党)	13,202 票

第5回 1963年4月30日 (投票率92.5%)

当 中川千代冶 (無所属)	19,724 票
藤田 定吉 (無所属)	17,250 票

第6回 1967年4月28日 (投票率91.8%)

当 山本 友一 (自民党)	20,983 票
中川千代冶 (無所属)	17,621 票

第7回 1971年4月25日 (投票率92.6%)

当 中川千代冶 (無所属)	21,005 票
山本 友一 (自民党)	19,011 票

第8回 1972年4月16日 (投票率89.1%)

当	山本 友一 (無所属)	22,116 票
	三好 金久 (無所属)	13,962 票
	菊池 竜平 (社会党)	1,319 票
	中井 鐸平 (無所属)	758 票
	稲井 勝 (共産党)	756 票
	高田 巖 (白石県政打倒県民同志会)	114 票

第9回 1976年4月11日 (投票率80.1%)

当	山本 友一 (無所属)	23,968 票
	佐藤 晴男 (無所属)	15,527 票

第10回 1980年4月13日 (投票率80.9%)

当	山本 友一 (無所属)	21,694 票
	中畑 義生 (自民党)	13,517 票
	渡辺 亨 (無所属)	2,696 票
	宇都宮久史 (無所属)	2,669 票

第11回 1981年2月8日 (投票率84.4%)

当	菊池 大蔵 (無所属)	16,209 票
	三浦 雅夫 (無所属)	15,775 票
	藤田 訓啓 (無所属)	10,308 票

第12回 1985年2月3日 (投票率77.8%)

当	菊池 大蔵 (無所属)	24,710 票
	柴田 勲 (無所属)	15,301 票

第13回 1989年1月29日 (投票率73.1%)

当	柴田 勲 (無所属)	17,312 票
	菊池 大蔵 (無所属)	16,744 票
	坂尾 真 (無所属)	3,246 票

第14回 1993年1月31日 (無投票)

当	柴田 勲 (無所属)	
---	------------	--

第15回 1997年1月26日(投票率50.2%)

当 柴田 勲(無所属)	16,486票
三浦 雅夫(無所属)	8,795票

第16回 2001年1月28日(投票率74.7%)

当 石橋 寛久(無所属)	14,065票
中川鹿太郎(無所属)	12,186票
浦瀬 明(無所属)	10,969票

第17回 2005年1月30日(投票率69.3%)

当 石橋 寛久(無所属)	17,711票
中川鹿太郎(無所属)	15,979票

第1回 2005年9月11日(投票率83.2%)

当 石橋 寛久(無所属)	26,440票
中川鹿太郎(無所属)	23,298票
梶山 義将(無所属)	12,201票

第2回 2009年8月30日(投票率81.0%)

当 石橋 寛久(無所属)	28,882票
中川鹿太郎(無所属)	22,889票
武田 元介(無所属)	6,249票

付2. 愛媛県議会議員選挙一宇和島市選挙区の結果

第1回 1947年4月30日(投票率85.3% [全県])

当 山本 友一(愛媛民主党)	7,978票
当 向井 三治(愛媛民主党)	5,717票
佐々木 饒(愛媛民主党)	5,447票
中田正太郎(無所属)	1,303票
久留島 豊(無所属)	617票

第2回 1951年4月30日(投票率88.7% [全県])

当 山本 友一(自由党)	8,732票
当 向井 三治(自由党)	7,729票
中川千代治(無所属)	6,675票
中畑 数一(無所属)	2,900票

第3回 1955年4月23日(投票率86.9%)

当 藤田 定吉(愛媛県政同志会)	10,616票
当 榎木棟太郎(無所属)	7,245票
中畑 数一(無所属)	5,451票
梶原 源一(愛媛県政同志会)	5,407票

第4回 1959年4月8日(投票率88.4%)

当 中畑 義秋(自民党)	10,364票
当 藤田 定吉(自民党)	8,883票
当 佐古田光義(自民党)	7,181票
国村 三朗(無所属)	6,727票
榎木棟太郎(自民党)	3,635票

第5回 1963年4月17日(投票率84.5%)

当 中畑 義秋(無所属)	12,165票
当 国村 三朗(社会党)	11,275票
佐古田光義(自民党)	10,486票

第6回 1967年4月15日(投票率82.6%)

当 佐古田光義(自民党)	10,631票
当 中畑 義秋(自民党)	9,720票
今村 徹(無所属)	7,865票
国村 三朗(社会党)	7,012票

第7回 1971年4月11日(投票率80.0%)

当 中畑 義生(自民党)	12,243票
当 佐古田光義(自民党)	11,146票
三浦 雅夫(無所属)	6,736票
宮内 勇(共産党)	3,019票

第8回 1975年4月13日(投票率85.3%)

当 中畑 義生(自民党)	11,369票
当 土居 幸治(無所属)	9,345票
当 三浦 雅夫(無所属)	9,085票
佐古田光義(自民党)	8,670票
松本三代一(社会党)	2,760票

第9回 1979年4月8日(投票率54.9%)

当 中畑 義生 (自民党)	11,907 票
当 土居 幸治 (自民党)	7,347 票
当 三浦 雅夫 (自民党)	7,122 票
飯森 義春 (無所属)	1,457 票

補欠選挙 1981年3月1日告示(無投票)

当 中川鹿太郎 (自民党)	
当 長沢 勇 (自民党)	

第10回 1983年4月10日(投票率78.6%)

当 中川鹿太郎 (自民党)	8,228 票
当 長沢 勇 (自民党)	8,043 票
当 中畑 保一 (無所属)	7,841 票
三浦 雅夫 (無所属)	7,671 票
土居 幸治 (自民党)	7,110 票
宇都宮久史 (共産党)	1,361 票

第11回 1987年4月12日(投票率78.4%)

当 中畑 保一 (自民党)	11,351 票
当 中川鹿太郎 (自民党)	9,261 票
当 三浦 雅夫 (無所属)	7,592 票
長沢 勇 (自民党)	7,442 票
石本 憲一 (共産党)	2,287 票

第12回 1991年4月7日(投票率73.9%)

当 山本 公一 (無所属)	11,674 票
当 中畑 保一 (自民党)	11,156 票
当 中川鹿太郎 (自民党)	9,442 票
三浦 雅夫 (無所属)	4,878 票

第13回 1995年4月9日(投票率66.5%)

当 中畑 保一 (自民党)	13,202 票
当 中川鹿太郎 (自民党)	9,086 票
当 仲田 中一 (無所属)	5,609 票
三浦 雅夫 (無所属)	5,359 票

第14回 1999年4月11日（投票率69.2%）

当 中畑 保一（無所属）	13,579 票
当 中川鹿太郎（無所属）	8,780 票
当 仲田 中一（自民党）	6,191 票
三浦 雅夫（無所属）	4,191 票
坂尾 啓子（共産党）	1,793 票

第15回 2003年4月13日（投票率61.6%）

当 中畑 保一（自民党）	12,782 票
当 仲田 中一（自民党）	9,505 票
大窪美代子（無所属）	7,484 票

第16回 2007年4月8日（無投票）

当 中畑 保一（自民党）
当 高山 康人（自民党）
当 毛利 修三（自民党）
当 赤松 泰伸（自民党）

注) 2007年から愛媛県議選の選挙区割りが再編され、宇和島市は北宇和郡と合区され、定数が4に増加した。

* 本論文は、2009年度松山大学特別研究助成の研究成果の一部である。